

# 経営と健康

## 第4回

## 栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

倒幕の先頭に立った薩摩、長州は、

関ヶ原合戦に敗れ、ことに長州は中国一円八カ国から六カ国も没収され、徳川に対する怨みは大です。

明治維新で薩長は天下を握りましたが、西南戦争の時には、旧会津藩は、「おのれ、西郷め」旧幕府の兵が多く参加し、鳥羽・伏見の仇をと、新選組を名乗る者までおり、「我々は官軍、西郷は賊軍」と、戊辰戦争の賊軍から官軍へ。そして第二次大戦前、三国同盟親ドイツの陸軍は薩長が多く、反対したのが海軍の米内光政海相盛岡出身、井上成美軍令部長が仙台出身、山本五十六連合艦隊司令長官が長岡出身。親アメリカというより、戊辰戦争で負けた苦しみから戦争はいかんという気持ちがあったのでしょうか。そしてポツダム宣言を受諾して無条件降伏を決めた時の首相鈴木貫太郎は関宿、千葉の

出身と歴史は巡るんです。

「幕臣の海舟が、開国論を唱えているのはおかしい、斬ってしまえ」と押しかけた坂本龍馬だったが、

「外国はまず商いをするため来ているのだ。日本は長い鎖国で総ての面で外国に遅れている。戦ったら国土を攻め取られ、植民地にされる恐れがある。日本が負けんようにするには、外国の文明を取り入れなければいけない。攘夷と騒いでいる君達若者が立ち上がった、日本を守るのだ」と、攘夷の無謀をさとされるや、斬るどころか、

「どうか、弟子にして下さい」「アメリカは対岸の日本を、捕鯨船の補給基地にしようということも考えていた。メルビル原作「白鯨」、映画ではグレゴリー・ペックがエイハブ船長

を演じていた。アメリカは鯨の油だけ取ってあとは捨てていた。日本は骨まで全部活用しているのに、「日本は鯨を捕っている、けしからん」と、叩くのはおかしいと思いますが。

海舟は、氷川清話の中で、「理屈は死んでいる。時代は生きている」と、説いています。旧態依然を主張する者がいたら、海舟の言葉のご利用を勧めています。

弟子となった龍馬は、海舟の創設した神戸海軍操練所の塾頭となるや、土佐や長州の浪士を海舟率いる幕府海軍の操縦者として訓練を開始。

「海舟は幕臣でありながら、勤皇倒幕の浪士たちを育成しているのはけしからん」と、幕府は海舟の軍艦奉行を

罷免。海舟は長州からだけでなく、

「あ奴は、幕府を売る犬だ」と、幕府の中にも狙う者いたので。

同じく龍馬も、脱藩者で過激な行動をする奴と、新選組は勿論、土佐藩からも狙われていた。

西郷とかつてひそかに会い、意気投合していた海舟は、「西郷さん、坂本以下三十名の浪士をかくまって頂きたい」

「承知しました」

大坂の薩摩屋敷にかくまいます。薩摩藩家老小松帯刀は、西郷の紹介で同い年の龍馬と会い、ここに帯刀、隆盛、龍馬の三人が話し合う機会が多くなり、意気投合していったのです。

小松は家老として、西郷、大久保を評価して意見を聴き、巧みにリードし、小松の邸での会合に、薩摩の大久保、

長州の桂小五郎（後の木戸孝允）、土佐の後藤象二郎、中岡慎太郎が加わり、その後の維新への原動力となっていくのでございます。

西郷、糸子と結婚

龍馬は、寺田屋のお竜と夫婦同様でしたから

「西郷さんも早う嫁さんを貰いなされ、ご家老、嫁さんを世話してあげて下さい」

西郷は、最初の妻と離婚、最初の流罪地奄美大島で愛加那を妻にし、生まれた菊次郎は、外交官となり台湾宜蘭庁長を務めた後、京都二代目市長となりますが、西郷は許されて復帰する時一人で帰ってきて、独り身だった。

「イヤー、これはうかつだった。早速世話しよう」

「ふさわしい女性をさがしてほしい」

お千賀は、大久保と相談して書記を務める岩山八郎太の長女糸子を推薦。トントン拍子で話がまとまります。

薩摩藩士有川矢九郎が、妻のいとこの糸子をいきなり連れてきて、西郷に了解させたとも言われているが、小松夫婦が仲人を務めたのは間違いないように、西郷三十七歳、糸子二十一歳。大河ドラマでは、幼馴染で吉之助に想いを寄せる女性に描かれています。十六も年下ですから当時は子どもは。糸子は再婚、150センチと小柄。西郷は京都で太った大柄の二人の女性を愛していますから、小柄の女性はどうだったんでしょう。

慶応元年、のちに大阪商工会議所を設立し、初代会長を務めた五代友厚の尽力で、小松は薩摩藩の若者十九名をイギリスへ留学させ、この中の一人磯永彦輔（長澤鼎）はわずか十三歳で留学し、その後アメリカへ渡って、ぶどうの栽培、ぶどう酒製造でアメリカのぶどう王となっています。明治四年の岩倉、大久保の西欧視察より七年も前です。

「ご家老、勝先生は外国の力に負けぬよう大藩が連合して、国を守ることに大切と話されています。わしは大藩

の薩摩と長州が合体することが必要と考えています。」

「坂本さん、私も今国内で争うべきでないと思っている。我が藩が再び長州を攻めれば、連合は出来なくなる。藩の意見をまとめるために帰国しよう」

「御家老、こんなに大勢お世話になつて申し訳ありません。何かよい仕事を探してください」

「薩摩は船で手広く商いをしているから、海軍塾の皆さんにうつつけの仕事があります」

薩摩は昔から他国の者の入国は厳しく制限し、幕府の隠密など無事帰国した者は極めて少なく、龍馬も以前関所で追い返されていたが、今度は小松、西郷と一緒に入国、小松の別荘に泊り、集成館を見学。造船所や溶鉱炉で大砲製造、紡績工場、ガラス工場、沖には軍艦、港には何隻もの千石船。陸軍、海軍の訓練も盛んに行われている。

この繁栄ぶりを見て、日本を建て直すためには、なんとしても薩摩・長州・土佐が連合することであると、強く認識したのでありました。

今も集成館には、高価なガラス工芸品が展示されています。

帯刀は、龍馬の塾生を長崎へ移動させ、龜山の借家を借りて住ませ、この龜山に住んだところから龜山社中。帯刀が海援隊生みの親と言えます。

龍馬は、開国論者横井小楠に続いて、都落ちしている三条実美らに薩長連合の話をするや皆大賛成。

「長州は朝敵の汚名を受け、再度の長州攻撃に直面していて軍艦や鉄砲が欲しいが、幕府の許可が無ければ取引できない。薩摩の名義が借りられれば薩摩とのわだかまりも解ける。どうか力を貸して頂きたい」との、長州の頼みを承諾。ここに薩長連合へと進むお話は、次号のお楽しみ。ポポン。

